

週刊新潮

6月17日号

「港のヨコ・ヨコハマ・ヨコスカ」から三十五年。阿木耀子・宇崎竜童夫妻はいまも第一線で活動する。この夏、阿木さんは水谷豊や鈴木雅之に詩を提供し、宇崎さんは岩城滉一と組んでコンサートツアーを展開中。二人が箱根に出かける時、定宿にしているのが「強羅環翠楼」である。阿木さんが語る。

「初めて宿泊してから、かれこれ二十数年になります。もとは主人が根津甚八さんたちとバイクのツーリングをしている時に見つけた宿。箱根にすごくいい宿があるから、今度二人で訪ねてみよう。お正月に休みが取れると、主人が運転する車に乗って出かけます。三が日を過ぎた頃を見計らって。強羅環翠楼と聞くと、一月七日、昭和天皇の崩御を思い出します。あの時も前日に宿泊し、翌日、チェックアウトして、東京へ戻る途中、ラジオのニュースで天皇の崩御を知りました。路肩に車を止め、二人で黙祷しました。J・F・ケネディやジョン・レノンが亡くなった日と同じように、克明

「強羅環翠楼」60年③

阿木耀子・宇崎竜童夫妻の「箱根ストーリー」



コラム・座間真一

に記憶に残っています。数年前、その強羅環翠楼の庭園の一隅に、露天風呂がお目見得しました。これも私のお気に入りです。私たちの宿泊が箱根駅伝の開催日と重なった年がありました。前の晩に露天風呂に入り、翌朝、もう一度入ったら、いやに筋骨隆々とした人が湯舟につかっている。しかもタオルを頭に乘せたりして。それでつきり駅伝の関係者だと思ひ込み、さすがに女性も逞しい体つきをしているなと感心していたら、間違えて男湯に入っていたんです。女湯と男湯が入れ替わっているのを知らず、ついうっかり。あの露天風呂から、山桜や紅葉を眺めたら、素晴らしいだろうと、いつも夢想しています。お料理も美味しい。松の内に泊まるので、おせちが並びます。これが料亭で味わうような凝った作り。一品ずつ部屋まで運ばれます。環翠楼に出かける時は、結構な荷物を持って行きます。主人は映画のビデオやDVD。大量の本。

私は針仕事、裁縫が好きなので、道具一式を持ち込み、部屋でカーテンを製作したことも。そのカーテンはいまでも家に掛けてあります。二人ともお酒はあまり飲みません。主人は下戸で、ウイスキーボンボンで酔ってしまします。私はビールとワインを各一杯ずつほど。一人なら部屋で書き仕事をすることも知れませんが、主人と一緒に、二回も三回も温泉につかり、終日のんびり。舅や妹やスタッフたちと泊まったこともあり。庭から猿が現われ、荷物を開けられて驚いたり。ある年、主人が膝を手術することになり、環翠楼に泊まったあと、東京の病院に入院する予定になっていました。ところが、入院用の浴衣を用意するのを忘れ、帯と一緒に、宿の方から頂戴しました。じつは主人と箱根に住みたいと話しています。箱根は歴史があり、格の高さを感じさせる場所です。俗っぽくなく、奥が深い。良い地場のエネルギーを放っている。老後は主人と共に大好きな箱根で暮らせたら最高ですよ」



強羅環翠楼
tel.0460-82-3141
<http://www.gourakansuirou.co.jp>